

2021年度

戊	
續	

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(春期・一般選抜) 問題

外国語 ( 日 本 語 )

一、次の文章を読んで、後の問に答えよ。

拘られた金は、私にとってはかなりの大金だったが、幸い、旅行をつづける上で(1)シショウになるほどではなかった。しかしその後しばらくの間、旅行をしてもどうしても必要以上に他人に対して警戒心が働いてしまい、ひどく気が疲れた。そういうときほど、一人で旅をしていること、(2)相棒なしに旅をしているのがうらめしく思われることはない。相棒あるいは道づれがあったからといって、スリに会う心配がまったくなくというわけではないけれど、二人になれば注意の及ばない死角はずっと少なくなるし、行動にずっと余裕がもてるようになる。

それに同行者としていい相棒が得られれば、旅をする上でなにかと都合な相談相手になるし、話し合うことで旅での経験を確かめ合うこともできる。ただし実際には、この道づれのえらび方はたいへん難しい。不適當な道づれをえらべば、互いに相手の自由な行動を(3)牽制し合ったり、束縛し合ったりすることになるだろう。互いに相手の独立性と自由をできるだけ尊重しながら、しかも必要なとき、いざというときには力になり合い、よき相談相手になるような関係がもつとも望ましいわけだ。いや、それほど理想的な関係が成り立たなくとも構わない。旅において道づれがいることは、自分以外のもう一つの眼〓他者を含み、その他者との対話をもちうるという点で貴重なことなのである。

では次に、グループの旅はどうだろうか。一口にグループでの旅といっても、の知れた親しい友人たちとの小人数の旅の場合と、いわゆる団体旅行、セット旅行の場合とは、一緒には考えられない。前者の場合には、グループでの旅といっても、よき道づれとの二人での旅と本質的にあまり異なるものでありうる。うまくいけば、人それぞれの独立性と自由を保ちうるからである。また、自己と他者との関係が固定的でなく可動的だから、その関係がうまく生かされれば、A旅はいっそう豊かなものになるだろう。

ただし人数があまり多くなると、人それぞれが旅先で現実<sub>ニ</sub>にふれることよりも、グループ内の相互のふれ合い、付き合いの方に重点がかかってくる。だからグループでの旅はしばしば、移動する宴会のようなものになるのである。いわゆる団体旅行、セット旅行の場合には、あらかじめ決められたコースがあつて、スケジュールもびつしりつまっているから、また、バスに乗ったままでお目あてのところに連れていってくれるから――まえに「身体」の章でも述べたように――旅ならではの独立性、自由、偶然性、異質の現実などとの接触が著しく弱くなる。もちろんそのようなグループ旅行も使い方によるし、そこで収穫にめぐまれることもあるけれど、その場合、旅のあり方も同行者のあり方もずいぶんちがってきているわけである。

どうも実際の旅の道づれ、同行者に少しばかりこだわりすぎたが、B〈知の旅〉にとっても同行者の有無や在り様は、なかなか大きな問題である。というより、実際の旅について見られたことは、ほとんどそのまま〈知の旅〉についてもいうことができる。すなわち、〈知の旅〉においても、旅はなによりも冒険と探険と自己解放と

をめざしたものである。だから、〈知の旅〉において自己の問題として自分一人でやらなければならないことがあるのは当然である。が、それだけでは十分とはいえない。さらにそこには、大局的にいって同じ方向へと歩む同行者たち、とくに、よき理解者であると同時にきびしい批判者でもあるような同行者たちが、どうしても必要である。よき理解者がいなければ、多くの困難が待つ知の冒険を挫けずに続けて行くことは難しい。また、きびしい批判者がいなければ、ひとは得てして自分を見失いやすく、自己満足に(4)陥りやすいわけである。

大局的に同じ方向を歩む、よき理解者であると同時にきびしい批判者でもあるような同行者が〈知の旅〉には必要である、と言った。大局的な意味で同じ方向を歩むというのは、各自が自分の専門や自分の関心に沿いながら、しかも領域をこえて現在新しく出てきている問題に共通に立ち向かうということである。特定の考え方に意見を統一するのではなく、ともに既成の固定観念から自由になり、現在なにがいちばん問われるべきであるかについて、開かれた心をもつことである。現在そのような知の革新、知の冒険は、過去の分類による特定の限られた領域、限られた専門のなかでは望みがたい。Cそこで、〈学際研究〉というようにことも提唱されたのであつた。けれども、それがなかなか実を結ばないのは、既成の固定観念から自由な開かれた心がよく共有されていないからである。

また、〈学際〉ということばがにぎやかに唱えられたとき、必要なのは〈学際〉ではなく、さらにすすんで〈学芸際〉ではなからうか、とひそかにつぶやいていた人がいる。それは林達夫氏である。日本語として熟していない〈学際〉ということばに対して、それを十分承知の上で、あえて〈学芸際〉などといういつそう熟していないことばを林氏がぶつつけたのは、一つにはことは遊びであった。が、もう一つには、真の知の革新には、学問相互の間だけでなく、学問とアート(芸術・技術)との交流・提携が必要なことを言わんとしてであった。学問とくに近代の学問は、(5)フンセキの方向をいつそう推しすすめ、アート、とくに芸術のもつイメージ的な全体性を失っていった。学問のなかでも総合化の努力はいろいろなかたちで行なわれてきたものの、なんといっても、根源的なイメージの全体性から離れていったのである。

(中村雄二郎・山口昌男『知の旅への誘い』〈岩波新書〉による。69～73頁)

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナは漢字に改め、漢字はその読みを記せ。

- (1) (2) (3) (4)
- (5)

問二 二重傍線部「うらめしく思われることはない」とあるが、「うらめしい」という語を用いて短文を作文せよ。

問三 空欄にあてはまる最も適切な語句を次の中から選び、○を付けよ。

- ① 結果      ② 高      ③ 名      ④ 気心

問四 傍線部A「旅はいつそう豊かなものになるだろう」とあるが、筆者が考える理想的な「旅の道づれ」とはどのようなものか。本文の内容に即して説明せよ。

問五 傍線部B「〈知の旅〉にとっても同行者の有無や在り様は、なかなか大きな問題である」とあるが、〈知の旅〉において求められる「同行者」のあり方とはどのようなものか。本文の内容に即して説明せよ。

問六 傍線部C「そこで、〈学際研究〉というようなことも提唱されたのであった」とあるが、〈学際研究〉を實現するためには、どうすることが必要であると筆者は述べているか。本文の内容に即して説明せよ。

二、問一〜二に答えよ。

問一 次の文中の空欄(①)〜(⑩)に当てはまる平仮名一文字を入れよ。答えは文中の( )内に直接記入せよ。

何か(①) (最初から完璧にできる人はいない。あること)② (繰り返し経験していれば、初めてやってみた時に比べ、自分の行動が変わっていることは誰でも様々なこと)③ (経験しているだろう)。

例えば、料理のことを考えてみよう。料理をまったくしたことがない人は、そもそも、自分でどのような材料でどのような料理をつくるのか考えることが難しい。料理本などのレシピを見ながらチャレンジしてみる。最初はどの食材(④) (どの形にどのくらいの厚さに切ればよいかもよくわからない。切るスピードも遅く、形も厚さも不揃いになってしまう。「お好みに応じて醤油

(⑤) (適量」と書かれていると「適量」がどのくらいなのか見当(⑥) (つかない)。

それが経験を積むにつれ、包丁の使い方も上手くなり、最初に比べて速く、きれいに切れるようになる。味見をしながら好みにあったり、別の食材で代用したり、ということもできるようになる。

(ここまでいくと、もはや料理の熟達者といってよいだろう。しかし、上には上(⑧) (いる。普通の人が普通の家庭の食事を手早くつくれる熟達のレベル)⑨ (プロの料理人に要求される熟達のレベルとはまったく異なる。もちろん、プロの料理人の中でもその腕前には個人差がある。他の人(⑩) (は真似できない、その人独自の「何か」がなければ一流の料理人とはいえない)。

(今井むつみ『学びとは何か (探求人)になるために』(岩波新書)による。97〜98頁)

問二 次の文中の空欄(①)～(⑩)に当てはまる日本語表現を直接記入せよ。

子どものときから、忘れてはいけない、忘れてはいけない、と教えられ、忘れたと言っては叱られてきた。そのせいもあって、  
 ① ( ) ことに恐怖心をいだき続けている。悪いときめてしまう。

学校が忘れるな、よく覚えろ、と② ( ) のは、それなりの理由がある。教室は知識を与える。知識をふやす  
 のを目標にする。せっかく与えたものを片端から、捨ててしまつては困る。よく覚えておけ。覚えていかどうか、ときどき試験を  
 して調べる。覚えていなければ減点して警告する。点がいい方がいいにきまつているから、みんな知らず知らずのうちに、忘れるの  
 を③ ( ) ようになる。

教育程度が高くなればなるほど、そして、頭がいいと言われれば、言われるほど、知識をたくさんもっている。つまり、忘れない  
 でいるものが多い。頭の優秀さは、記憶力の優秀さとしは同じ意味をもっている。それで、生き字引というような人間ができる。

ここで、われわれの頭を、どう④ ( ) かが、問題である。

これまでの教育では、人間の頭脳を、倉庫のようなものと見てきた。知識をどんどん蓄積する。倉庫は大きければ大きいほどよ  
 るしい。中にたくさんのもものが詰っていれはいるほど結構だとなる。

せっかく蓄積しようとしている一方から、どんどんものがなくなつて行つたりしてはことだから、忘れるな、が合言葉になる。と  
 きどき在庫検査をして、なくなつていないかどうかを⑤ ( ) 。それがテストである。

倉庫としての頭にとっては、忘却は敵である。博識は学問のある証拠であった。ところが、こういう人間頭脳にとつておそるべき  
 敵が⑥ ( ) 。コンピュータである。これが倉庫としてはすばらしい機能をもっている。いったん入れたもの  
 は決して⑦ ( ) 。必要なときには、さつと⑧ ( ) ことができる。整理も完全である。

コンピュータの出現、普及にともなつて、人間の頭を倉庫として使うことに、疑問がわいてきた。コンピュータ人間をこしら  
 えていたのでは、本もののコンピュータに⑨ ( ) わけがない。

そこでようやく創造的人間ということが問題になってきた。コンピュータの⑩ ( ) ことをしなくては、と  
 いうのである。

(外山滋比古『思考の整理学』ちくま文庫)による。110～111頁)

三、次の文章を読んで、全体の要旨を二〇〇字以内で記せ。

たとえばパーティの席で、酒好きの人が、酒を飲めない人に向かって言う。「かわいそうにね。人生最良の楽しみの一つを知らないなんて」。酒を飲めない人は、この種のことを言われるのに慣れていて、「いや、そんなことはないですよ」と軽く応対すると、「酒を飲めない人に、こんな美味いものを無理に飲ませることはないか。もったいない」と言われる。別にそのままやり過ぎればそれで終わりなのだが、酒を飲めない人はまれにこう言い返す。「別に酒を飲めないことは、自分にとっては欠如でもなんでもないですよ。かわいそうでもなければ、楽しみが一つ少ないわけでもない。そもそも『酒を飲めない人』という言い方も、酒好きの人がそう呼んでいるだけで、こういう場面におかれなければ、自分は特に『酒を飲めない人』でさえない。『酒を飲む／飲めない』ということ自体が普段まったく問題にならないのですから。勝手なことを言わないで、黙って飲んでいればいいではないですか」。当然、その後はいやな雰囲気になる。

酒好きの人と酒を飲めない人とのこの関係は、非対称的である。「酒を飲む／飲めない」という区分は、まず「酒を飲む」側から投げかけられる。「酒を飲めない」ということが焦点化されるのは、飲めない人自身によってではなく、飲む人の側からである。そもそも酒を飲めない人自身にとっては、「酒」は焦点化されてなどいないのだから、自分は特に「酒を飲めない人」でさえない。酒を飲めない人は、酒を飲む人の視線を経由した後に、はじめて「酒を飲めない人」になる。当然、酒を飲めないという「不幸」や「欠如」も、「酒を飲めない人」になった後に、はじめて生じる。

酒を飲めない人は、この関係が理不尽であることを知っているが、酒好きの人には、自分の投げかけている視線から独立に、酒を飲めないことの「不幸」が、酒を飲めない人の中に「ある」かのように見える。そして、その「錯覚」が多数派である限り、それは「常識」として流通する。さらに酒を飲めない人の側も、その「常識」を内面化し、酒を飲めないことが「楽しみの欠如」であると見なすようにさえなる。

しかし、上記の酒を飲めない人のように、その理不尽さに腹を立てて反論しても、無駄である。この非対称性は解消できないどころか、さらに補完される。それは、この非対称な関係によって失われてしまっているのが、無関係性だからである。反論することは、関係することである。「不幸」や「欠如」なんてそもそもなかったはずのものだと強く反論する限り、「不幸」や「欠如」は、そもそもはなかった「不幸」や「欠如」として、その不在が強く意識されすぎてしまう。もともとは、ただ単に「不幸」や「欠如」が「もちろん」「幸福」や「充溢」も「生じていなかったというだけのことであるのに。

無粋な反論などせず、ただいつものようにやり過ぎた方が、その過剰に陥ることは避けられただろう。しかしその場合、理不尽な非対称性は温存され、酒好きの「常識」は「常識」であることを続けるだろう。無関係性を回復することは、いったん関係を通じた以上、不可能なのである。もちろん、酒好きの人は上記のような失礼な発言を慎むことはできるし、そうすべきであろう。しかし、両者のどんな紳士的な対応によっても、非対称性は、明らかにならなくなってしまった以上、なかったことにすることはできない。

